

令和7年度秋田県総合政策審議会

第1回 観光・交流部会

(議事要旨)

1 日時 令和7年7月3日(木) 午後3時10分～午後5時

2 場所 秋田地方総合庁舎6階 610会議室

3 出席者(敬称略)

【観光・交流部会委員】

吉澤 清良・・・・・・立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部教授

守屋 奈美・・・・・・有限会社石孫本店 総務企画・海外担当

豊田 哲也・・・・・・国際教養大学 中嶋記念図書館長・教授

【専門委員】

芦立 さやか・・・・・・NPO 法人アーツセンターあきた 秋田市文化創造館ディレクター

村上 聖子・・・・・・秋田県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会 幹事長

【県】

観光文化スポーツ部 次長 高島 知行 ほか関係課長等

4 高島観光文化スポーツ部次長あいさつ

県政の運営指針である新秋田元気創造プランについては、令和4年度から7年度を推進期間としており、今年度がその最終年度となっている。当部会においては「観光・交流戦略」について、これまでの事業の振り返りを行うとともに、来年度からの次期総合計画の素案作成に向け検討していただく。

コロナ禍収束以降、我が国の観光需要は大きく高まっているものの、本県は全国に比べて回復が遅れている。多様化するニーズに応える魅力的なコンテンツや受け入れ態勢づくり、あるいは秋田の魅力の効果的な発信等、戦略的に進めていくべき項目は多岐にわたる。

県では7月1日にマーケティング戦略室を設置し、観光や交流の施策についてもマーケティング手法を導入し課題解決につなげていくこととしている。観光・交流戦略では観光と多様な分野との連携・融合により交流人口の拡大を図っていくということを狙いとしており、繁閑差の平準化をはじめ観光業が抱える課題に対処しながら、地域に根ざした食、

文化、スポーツと観光との連携を強化するとともに、観光をはじめ周遊の基盤となる交通ネットワークの充実を図ることで交流人口を増やしていきたいと考えている。

当部会は、観光、食、文化、スポーツ、交通と、幅広い分野を対象としており、限られた時間ではあるが、委員の皆様には、是非、闊達な意見交換をしていただきたい。また、必要に応じ、委員の皆様と県執行部との間で意見を交わすなどし、議論を深めていきたい。

5 議事

(1) 令和7年度の観光・交流部会の進め方について

☐大森観光戦略課長

(部会のスケジュール等について、資料1により説明)

●吉澤部会長

ただ今の説明に、質問はあるか。

(なし)

(2) 「新秋田元気創造プラン」戦略3の推進に係る令和4～7年度の主な取組について

☐大森観光戦略課長

(重点戦略3 観光・交流戦略のこれまでの主な取組について資料2-1により説明)

☐大森観光戦略課長

(観光文化スポーツ部 令和7年度の主な取組について、資料2-2により説明)

☐永澤道路課政策監

(建設部 観光交流戦略3に係る今年度の主な取組について、資料2-3により説明)

☐千葉港湾空港課長

(建設部 観光交流戦略3に係る今年度の主な取組について、資料2-3により説明)

☐加賀谷自然保護課長

(生活環境部 観光交流戦略3に係る今年度の主な取組について、資料2-4により説明)

☐大森観光戦略課長

(重点戦略3 観光・交流戦略の課題と対応方針について資料2-1により説明)

●吉澤部会長

ただいま説明いただいたこれまでの取組と、今年度の取組、課題と対応方針のうち、最も重要と思われる課題と対応方針について、目指す姿毎に伺う。

まずは目指す姿１、何度でも訪れたい秋田について意見を伺いたい。

○豊田委員

観光振興について、今回新しくマーケティングを大事にするとある。ビジネスの観点からみると、観光サービスを提供する側が売り込みたいものを提供するのではなく、観光客のニーズを捉えて提供しなければ、観光サービスとしては売れない。売りたいものではなく、秋田の観光で売れるものは何かということを考えてほしい。

観光客が秋田への旅行計画を立てる時点で、インターネット上に情報がなければ、素材がないのと同義である。秋田で提供しているサービスについてはインターネット上で情報提供しないと意味がない。また、多言語で情報提供がなければ、インバウンド客にとっては、情報提供がないのと同じである。

秋田県のインバウンド観光が芳しくない要因は、適切な情報提供ができていないためであるということを改めて認識する必要がある。

また、目指す姿１の名称「何度でも訪れたい秋田」について、観光で同じ土地を何度でも訪れる人はほとんどいない。検証可能な目標であるのかも含め、次期総合計画作成の際には検討してみたい。

●吉澤部会長

観光は関係人口増加につながる分野でもある。秋田へ移住した芦立委員からみて、秋田の魅力とは何か。

○芦立委員

秋田に住んで４年経ったが、住めば住むほど文化や自然の魅力の底が知れず、素晴らしいと感じる。

本日、勤務先の秋田市文化創造館には、大型クルーズ船の乗客が数百人規模で来館した。当館の天井高を活かして竿燈を披露し、その迫力にとっても喜ばれた。関連グッズもよく売れていたようだった。

本日創造館を訪れた乗客は、一度秋田を体験し、もう秋田を訪れることがないかもしれない。しかし、今回訪れた方が、SNSや口コミ等で、秋田で出会った素敵なものや体験を発信することで、次の観光客につながったり、県民が秋田県の良さを認知するきっかけになったりすることもあるのではないかと。そうした、秋田県を訪れた方の発信について、追跡できているのか気になった。

また、なまはげや竿燈などの伝統芸能、文化について、パフォーマンスの部分だけではなく、五穀豊穡や祈りなど、その原点となった部分、文化の継承についても大事にしながら、秋田の魅力としてPRして欲しい。いつでもどこでも観光客が喜ぶから

と見せていると、自ら大切な文化を安売りしてしまうことにつながるのではないかと懸念する。

白神山地への道筋を調べた際、藤里町から行けるという情報を得るのに苦労した。白神山地をはじめとする県境の観光地については、魅力発信も含め、県をまたいで連携を図っていくことも必要でないかと思う。

○守屋委員

今後の対応方針として、「質の高いマーケティングによりその秋田の「推し」を明確化し効果的なプロモーションによる誘客」とあるが、このターゲットについても明確にしていける必要があるのではないか。そのためには、観光客のニーズをしっかりと把握しなければならない。マーケティングの元となるデータの取得先についても気になった。

○村上委員

伝統芸能について、パフォーマンスの部分だけが切り取られているように感じるというのは、私も感じているところである。秋田の無形文化財や地域行事等、秋田でしか観られないもの、限られた期間にしか観られないものの魅力の発信方法を県として戦略立てて考えていってほしい。

○豊田委員

県内には様々な無形文化財、伝統芸能がある。秋田にどんな「日本一」のものがあるのか把握し、しっかりと情報発信を行っていく必要がある。

また、観光コンテンツの磨き上げについて、例えば竿燈祭りは既に全国的に有名で、開催期間には周辺の宿泊施設が埋まってしまうような状況にある。観光業をビジネスの観点で見た場合、竿燈祭りのような、既に人を呼び込む力を持ったコンテンツを磨き上げるのではなく、経済効果として伸びしろがあるコンテンツの磨き上げを行うべきである。観光産業の成長のためには、ビジネスとして成立するのかという視点が必要である。

●吉澤部会長

目指す姿1について、様々な意見をいただいたが一つ付け加えさせていただく。冒頭の豊田委員の、売り込みたいものではなく、観光客のニーズに応えるものを売るというマーケットインの考えについては、私も賛成である。

その一方で、例えば日本一のものであるとか、秋田として自慢できるものや独自性を前面に押し出していく、プロダクトアウトの発想もあって良い。例えば大分県の由布院では、前述のようなプロモーションによりブランドイメージを確立し、観光客を獲得している。秋田県として何を売り込んでいきたいのか、マーケティングの視点も含め、見定めて取り組んでいってほしい。

続いて、目指す姿2「美酒・美食の秋田」の創造に関して伺いたい。

○守屋委員

対応方針として、販路拡大を挙げている。こちらについては、国内外それぞれ、支援を展開するようお願いしたい。例えば輸出など海外を狙いたい企業には、現地に行けるような支援、国内についてはマッチング商談会のような機会創出の取組など、各事業者の狙いやニーズを捉えた取組を進めていただきたい。

また、こうした支援やイベントの情報発信についても、本決定の前に、予定の時点で情報発信をするなど、積極的に発信して欲しい。情報発信としては、新たに県産食品紹介サイトがオープンしたが、現在の活用状況等はどうか。

□佐藤食のあきた推進課長

新たにオープンした県産食品紹介サイト「千彩万食」について、現在、県内の事業者約 350 社中、199 社に登録いただいております、更なる登録者増に向け働きかけているところである。県では「あきた食のチャンピオンシップ」という事業も行っているが、「千彩万食」から応募できるようにしたところ、応募件数が昨年度の 59 件から今年度は 90 商品となり、約 1.5 倍となった。気軽に応募ができることが要因と考えている。

ウェブサイト上ではマッチング商談会などの情報も提供しており、今後も改良しながら続けていきたい。

○守屋委員

関東圏など、県外の飲食店等へのウェブサイトのアプローチはできているか。

□佐藤食のあきた推進課長

7 月にマッチング商談会を予定しており、首都圏の飲食店やバイヤーに紹介する予定としている。これを機に、より多くのバイヤーに見てもらえるよう PR していきたい。

○守屋委員

秋田のいいものをまとめて見られるウェブサイトであり、1 事業所単位でもビジネスにつながれる大きなチャンスがある。ウェブサイトの県内外への積極的な発信をお願いするとともに、事業者のビジネスチャンスにつながるような取組を今後も推進してほしい。

○芦立委員

農家レストランというジャンルについて、新鮮な野菜がとても美味しく、機会があれば行くようにしている。事業者同士のつながりがあるからこそ、そういった新鮮なものが提供できるのだと思う。生産者と売り手をつなげる取組は必要である。

秋田県内には湧き水が豊富で、湧き水をくめるところも多く感動している。美郷町の水のステーションは何度か利用した。秋田に来てからは大きい水くみボトルを買って、車に積んでいる。水がすごく豊かであるということは、食品づくりに生かすほかにも、

観光の目玉にもなり得るコンテンツでもあると感じる。

●吉澤部会長

食や食材等、そういったものをプロモーションする際、その背景に豊かな綺麗な水があるということを含めて魅力を伝えていけば、高付加価値化にもつながるかと思う。

○豊田委員

私も秋田が好きで、長く住んでいることもあり、秋田の良さはよく分かっている。しかし秋田にこれから旅行で来る方、あるいは秋田のものを買いたいという人にとっては、秋田や秋田の食の魅力は、説明してくれないと分からない。

県では発酵食品のプロモーションを5年以上やっているかと思うが、未だに秋田県の発酵食品が他県の発酵食品とどう違うのかということが全く見えてこない。市場の中での秋田の加工食品の差別化には至っていないと感じる。

プロモーションの見直しなど、改善や他県との差別化に向けた手法は様々あると思うが、発酵プロジェクトについては一定の役割をすでに終えたと整理し、発酵食品以外でのアプローチ方法や売り込み方についても検討していく段階に来ているのではないかと、いうことを提言したい。

●吉澤部会長

続けて目指す姿3「文化芸術の力による魅力ある地域の創生」について伺いたい。

○芦立委員

毎日様々な年齢層の方が数多くミルハスに来館している。地域の高校生や大学生にとっては、ミルハスで発表することを目指して日々練習に励んでいる方がいるなど、憧れの場所、文化芸術の拠点としての役割を果たしている。

一方で、文化芸術の発信という点においては、秋田の文化芸術が何を指すのか、何をイメージしてもらいたいのかが分かりづらい。無形文化財が無数にある秋田において、秋田の文化・芸術として何を情報発信していくかについては、検討の余地があるのではないか。

私は今月だけで、秋田に2つの全国大会があることを知った。1つが鹿角で開催された声良鶏（こえよしどり）の鳴き声を競うもの、2つ目が、土崎の港の唄全国大会。それぞれ、一般にはあまり知られていない大会かもしれないが、熱量の高い人が集まり、遠くは兵庫県からいらっしゃった方もいた。観光の話にもなるが、そういった熱量の高い人たちこそ、県外から繰り返し秋田に行きたいと思ってくれるし、秋田を大切に思ってくれるのではないか。少数でもそういった熱量の高い人を呼べる文化事業が、実は県内には数多くあるということ、観光に携わる方はじめ、県民の皆さんにも是非知ってもらいたい。

●吉澤部会長

文化芸術にも様々ある、知事の言葉を借りるのであれば、解像度を上げていくということだろうか。どこに優先順位をつけて展開していくのかという視点が必要である。

○豊田委員

文化芸術をツーリズムと無理に結び付けることは推奨しない。ミルハスの素晴らしさも文化創造館の素晴らしさも、観光客を誘致することに寄与しているから素晴らしいのではない。ミルハスがあることによって秋田市の中心部は格式高いものになって、文化の交わる街になって、若者にとって「ここだったらこのまま住み続けてもいいかもしれない」と思えるような文化的な価値を生み出しているから素晴らしいのである。

ミルハスについては、教育部会でも扱っており、棲み分けを整理すべきでないか。ミルハスの良さは観光ビジネスに寄与するから素晴らしいのではなく、秋田の文化芸術の水準を高めているから素晴らしいのであり、そちらを重点とした方がよいのではないか。

●吉澤部会長

観光の部会の扱う範囲が多岐にわたっていて、外向き、いわゆる観光客に向けているものと、県民の文化芸術の水準を上げるなど、県内向けのものが入り交じっている。

例えば目指す姿4については、スポーツの実施率を上げて県民の健康を増進していこうというものも含まれている。その辺りがどうしても両立するため、部会の棲み分けとしては、少し難しいところがある。

企画部会では観光・交流部会の内容や提言が非常に多岐に渡ることを改めて伝え、連携調整しながら進めていきたいと申し上げている。場合によっては新しく総合計画を作るにあたり、より専門的なところは他の部会へ移管するという考えもあるかもしれない。

では、続いて、目指す姿4の「「活気あふれるスポーツ立県あきた」の実現」について意見を伺いたい。

○村上委員

どこにおいても少子高齢化は耳に痛い課題である。秋田県には、幼い子供から高齢者まで、全ての県民が健康に過ごせることを目指す「スポーツ立県秋田」の実現がある。

強化育成システム、及び指導者の資質向上を図ることは当然である。しかし、小中学生を対象としたスポーツの裾野拡大に取り組むとの記述には、更に言葉を補足する必要があると感じる。スポーツにおいては、幼少期からの身体づくり、栄養摂取、各競技における年代に応じた指導方法、そして指導者の育成といった要素が不可欠である。生まれた時からとは言わないが、幼稚園入園の頃からそうした取組を進めなければいけない。小学生や中学生のみに特化した取組では不十分であり、より幅広い視点で捉えるべきである。

近年、スポーツボランティアの競技団体が立ち上がっているが、指導者側の高齢化も聞かれる中で、県民一体となって地域におけるボランティアスポーツを展開する形が、個人的には望ましいと感じている。そういった中であってこそ、各地域で大会が開かれ、交流人口の拡大等につながるのではないか。

また、スポーツ大会においては、ブラウブリッツ秋田やノーザンハピネッツといったJリーグやBリーグ等、より上位の大会を目指す企業が存在することは、秋田県にとっても大変心強いことである。彼らの活躍は、地域の子どもたちの目標となり、秋田県の将来の子どもたちへの道標となるつながりを生み出すことが期待されるほか、スポーツ大会において、食や観光情報をスポーツと一体となって大きく発信することで、秋田の魅力がさらに広がると考える。

●吉澤部会長

地域のスポーツ振興を支える団体の運営に当たって苦勞している部分について伺いたい。

○村上委員

当団体においては、湯沢市と提携し、4つの指定管理を受けている。その指定管理の対象には、中学校のグラウンドや野球場も含まれており、地域一体となって中学生を支援し、彼らが活躍できる場所を残す取組を実施している。しかし、昨今、秋田市内では活動場所の確保が困難であるとの話も聞かれるため、県から市町村への働きかけ、活動場所確保に向けたより手厚い支援や情報発信が望まれる。

この観光戦略については、スポーツ立県秋田を基盤とし、各市町村がこの方針をどの程度理解しているかが重要である。また、その実現に向けて、当クラブが活動する地域では稲庭うどんが有名であり、地域と連携しながら、食などの地域資源情報も併せて発信している。県では田沢湖スキー場でのモーグルの国際大会誘致や国際選手の招聘といった事例も存在するため、これまでの取組を検証しながらスポーツ大会に絡め、観光に限らず秋田県をアピールしていくべきであると考ええる。

●吉澤部会長

一つ前の文化芸術に関する議題のところでもあったが、県民に向けての発信という部分については、今後取り組むべき課題に思える。

続いて、目指す姿5「国内外との交流と住民の暮らしを支える交通ネットワークの構築」について伺いたい。

○豊田委員

総合政策審議会では、持続可能な地域社会の実現のためには、運転免許を持たない高齢者や若者世代にも配慮し、歩行者が快適に生活できるよう公共交通の維持発展が必要でないかとの意見を出した。

公共交通と観光との関係でももちろんそうだが、観光と切り離して考えたとしても、秋田の未来を考える上で、地域公共交通の維持発展は非常に経済効果の高い取組である。関係部署においては、財政当局へその点をしっかり説明し、交通分野に関し更に多くの事業展開を行ってもらいたい。

●吉澤部会長

先日、大分県が推進する事業としてＪＲ九州が母体となってコンソーシアムを組んでいる、「空飛ぶ車」の２０２８年度実証に向けた会議に参加した。そこでは、大学生も加わり、まず地域課題とは何か、その地域課題のうち、空飛ぶ車で解決できるとすればどんなものがあるのかという二段階に分けて議論が交わされた。災害や医療、福祉、観光含め複合的な課題が出てきた中で、それらが空飛ぶ車で解決できるのではないかと、そこで昨日の会議は終わり、今後深めていく。

空飛ぶ車でなくても、今まさに、総合計画という中長期の話をするので、そこに向けて、他でやっていないようなチャレンジングな取組が、交通分野にあってもいいのではないか。

（３）次期総合計画における観光・交流戦略の推進に係る施策の提言について

●吉澤部会長

参考資料２は、「新秋田元気創造プラン」戦略３の推進にかかる施策の提言にかかるレジュメとある。次期総合計画の骨格が固まっていないため、現計画に基づいて議論を進めていき、骨子が固まり次第、整理していく。

これまでの議論と重なる部分もあるかと思うが、課題や施策の方向性、それに紐付く取組に対する意見を伺いたい。

まずは目指す姿１について私から。秋田県にあってはまだ導入した自治体はないが、宿泊税はじめ、観光財源についての議論が全国各地、特に都道府県単位でも盛んに行われている。宿泊税の導入にあたっては、客室の提供価格が上がる等、事業者から様々な意見が挙がることは承知している。提言とするかは別として、宿泊税については、観光財源の一つとして頭の片隅に置いておいてほしい。

○守屋委員

冬季・インバウンド誘客による繁閑差の解消について、すごく大事な視点であることは承知しているが、冬季以外の、既に観光客が来ている時期に、しっかりと稼げているのか、「稼ぐ」体制づくりになっているかという視点も必要ではないか。

冬は個人的にはどうしてもスキーやかまくら、冬の行事に合わせるというイメージになってしまう。それも大事なのだが、呼び込める時はどんな時なのかというデータ分析も更に行ってみてもいいのではないか。

取組の中で「台湾・香港・欧州におけるＳＮＳ等による情報発信の強化」とあるが、漠然としているように感じる。例えば台湾のこういった方を呼び込むために、どういった内容で発信していくのか、事業単位ではそういったところまで分析できているのか気になった。

○芦立委員

秋田の観光戦略において、冬季インバウンドだけでなく、土日以外の平日やオフシーズンの集客も重要である。イベントがない時期でも、常時楽しめる秋田の魅力の発信が不可欠である。

クルーズ船で来ても顧客は「どうしていいかわからない」状況で、秋田駅周辺をうろうろしている姿も散見される。

現状のクルーズ船客への対応では、竿燈祭りなどのパフォーマンスをしたり、観光バス等で中心市街地や主要観光地へ連れて行ったりしているが、特化したニーズに応える、よりきめ細やかな体験や店舗情報を提供することも必要でないか。マス向けではない、特定の顧客層（ニッチ層）のニーズを掘り起こす視点も求められる。

また、英語による案内や情報提供の強化も必要である。特定の全国大会のようなニッチな情報も、海外の関心層に響く可能性がある。秋田が距離的に「行きにくい場所」という認識は、むしろポジティブな要素として活用できるのではないか。さらに、「今しか見られないかもしれない」という、消滅の危機にある文化を取り上げ、大切にしていくことも、誘客につながる可能性を秘めている。文化継承と保護と共に、その希少性を活かした誘致方法も検討すべきである。

○豊田委員

観光ビジネスは収益を具体的に考慮すべきものである。現状の観光戦略における「目指す姿」には、収益に結び付ける発想が不足しているように思える。

例えば、観光事業における収入は宿泊や飲食による部分が多いが、クルーズ船の乗客は朝に来て夕方には帰ってしまうため食事をせず、見学が主となり、土産物購入も1,000円から2,000円程度にとどまっている。クルーズ船の受け入れは観光ビジネスとしての収益への貢献度は低いと言わざるを得ない。

したがって、クルーズ船受け入れに対しての一般財源の投入については、費用対効果を厳しく評価しながら、来年度以降もその点を厳格に検討すべきである

●吉澤部会長

目指す姿2「美酒・美食の秋田」の創造においては、大きく三点の課題が存在する。これらは「マーケットへの対応」、「輸出商材の多様化、事業者の掘り起こし」、「食と観光の連携強化」であり。その方向性としては四点が挙げられているが、先ほど守屋委員から国内市場への言及が強調されたように、この部分においてさらに言及すべき点、あるいは追加すべき点、質問等があれば提示されたい。

(なし)

●吉澤部会長

続いて目指す姿3についてはどうか。

○芦立委員

秋田市文化創造館では、県外や海外からクリエイターを招へいし、秋田に一定期間滞在していただき、地元の方々と一緒に創作活動やワークショップを行っている。それにより、県民や市民が外からの視点による秋田の価値や特異性を、可視化できる機会が生まれている。

文化もスポーツも、目標があるともっと高みを目指して自ら努力していくことにつながるため、プロフェッショナルや多様な価値観を持った人に触れる機会、交流する機会を持つことは非常に大切である。

●吉澤部会長

続いて目指す姿4についてはどうか。

○豊田委員

スポーツ関係の施策については、高齢化する県民の健康を支える上でも、あるいは若者の定着を進める上でも極めて重要である。スポーツ活動は観光ビジネスや交流人口の拡大とは切り離して考えるべき、極めて重要な分野である。

目指す姿の方向性の一つに「スポーツを通じた地域づくりと交流人口関係人口の拡大」とあるが、まずは、スポーツの普及等、本質的な部分を優先してはどうか。

○村上委員

運動実施率の向上で目指すところの県民の健康というのは、食や文化、ひいては観光にもつながる部分である。秋田自体が元気でないことには人を呼び込めないと思っている。

県内においても、秋田市はじめ人口規模の大きい自治体とそうでない自治体では、人口比率も違ってきており、スポーツに関する取組をはじめ、温度差が生まれてしまうのではないかと感じている。スポーツ分野に限らず、観光等についても、その地域や、住民によほど熱い気持ちや力がないと、なかなか1市町村単位で活性化したり、一施策に注力したりするというのが難しい時代になってきているのではないか。スポーツ立県秋田についても、県が先頭となり、住んでいる市町村に関わらず、県内全域の方がスポーツに関われる発信方法や取組を模索してもらいたい。

○村上委員

秋田県内の交通の利便性については、市中心部と、県境や山に近い地域では大きく異なると認識している。

各市町村では工夫を凝らし、バスを運行させるなどの取組を実施しているようである。しかし、今後は学校統合や、中学校の部活動の地域移行、教員の働き方改革といった課題を各市町村が抱えていると認識している。そのような状況において、保護者が子どもたちを活動場所へ送迎する際の交通手段の不足は、単に1kmや2kmといった距離の問題ではない。子供たちのための交通手段は今後ますます必要となる。二次交通のような地域公共交通の確保に向けた市町村への手厚い支援が望まれる。この支援は子どもだけでなく、より多くの住民を含めた対策であるべきである。

●吉澤部会長

続いて目指す姿5について、秋田空港、大館能代空港の利活用促進、需要喚起につい

ては、利便性の周知等、今後も継続していってもらいところである。特に秋田空港については東北全体においても規模が大きく、重要な役割を果たしている。チャーター便を定期便につなげるような中長期的な絵を描き、整備を推進すべきでないか。

二次交通については、他の自治体の例だと、別府市も二次交通問題を抱えており、ゴールデンウィークから8月末までライドシェアを試行している。取組は好評であると聞いている。

秋田県においても、ライドシェアを含め、二次交通に関しては、様々な取組を試行することが適切であると考えられる。総合計画は中長期的な視点を持つものであり、昨年度の提言書にもライドシェアは記載したところであるが、本年度は地域の公共交通の代替手段となり得るライドシェアを含む取組を、より積極的に計画に盛り込むべきである。

○芦立委員

インバウンド増に向けては、県外からの訪問客を含めた対策として、例えば既存のインフラ、具体的には Google マップのようなツールに公共交通の情報を載せることができるのではないか。既に実施している市町村もあるかもしれないが、過去にロンドンに居住していた際、Google マップ上でバスの現在地、到着時刻、運賃、経路がすべて把握でき、土地勘のない移住者としては非常に便利であった経験がある。現在バスがどこを走行しているかといった情報まで把握できることで、大きく助けられた。現状、海外からの訪問客はタクシーを利用する傾向にあるかもしれないが、公共交通機関を利用する人々にとって、便利なシステムは既に多数存在するため、積極的に観光客向けに周知し活用すべきである。

●吉澤部会長

時間となったため、続きは次回での議論とする。議題4その他として、何かこの場で共有したいこと等あるか。

○豊田委員

クマの問題について。今県内全体のクマの出没は危機的な状況であり、観光にも大きな影響を与えている。施設が閉鎖されてしまうなど、観光客への影響以上に県民の生活に影響が拡大しており、クマの問題は深刻な問題だと思う。

自然保護課では様々な対策をしているかと思うが、これくらい深刻な問題なのだから、極端な話、すべての事業を来年度はやめて、全てクマ対策に注力するような姿勢も必要でないか。危機感をもって取り組んでほしいところであると強調しておく。

□加賀谷自然保護課長

クマの出没は非常に多く、6月だけで約800件の報告があり、これは過去5年間の3倍以上と極めて多い状況である。しかし、その中で人身被害はまだ2件にとどまっている。各地域で住民がそれぞれ注意を払い、学校等でも周知を徹底して登下校しているおかげであり、引き続き被害を避ける行動をお願いしたい。

県としても、クマが市街地に来る理由や、市街地へ出没しないようにするための方法

を解明するため、定点カメラ等を設置し、行動パターンを分析・研究する段階にある。山奥に生息するクマについては問題ないが、人里近くに出没する「アーバンベア」も存在する。これに対し、今年度から市町村において管理強化ゾーンを設け、春に追い払い、または駆除を行うことで山へ戻す取り組みを実施することとしている。

しかし、クマは野生動物であるため、人間の力が及ばない部分も存在するのは事実である。そのため、すべての予算をクマ対策に充てることは現実的には困難である。

対策に従事する人材の育成も必要であり高齢化も進行しているため、これらの要素を組み合わせた対策を進める必要がある。

秋田県で発生した八幡平での人身被害に関し、被害者が秋田のクマは鈴の音に慣れていると聞き、他の地域では鈴をつけていたが秋田ではつけなかったという情報があるが、これは対策としては誤りである。

音に慣れているクマも存在するが、そうしたクマが出没する地域は立ち入り禁止措置が取られている。山に入る際には、声を出す、クマよけスプレーを携帯する、鈴をつけるなど、突発的な遭遇を避けるための対策を徹底してほしい。

【閉会】